

『天地始之事』における地獄

西牟田 祐樹

Created on: 2024/11/24

Last Modified on: 2025/01/25

1 序章

キリスト教と仏教に共通する思想として天国と地獄の存在が挙げられる。しかし、キリスト教の地獄は永遠の罰を受ける場であるのに対して¹、仏教での地獄は非常に長い時間であるが有限であり、その期間の責苦ののちに次の生に輪廻するという大きな違いがある²。西洋においては十二世紀に死後世界の構造が変化し、地獄が分化して煉獄とリンボが生まれ複雑化した(ゴッフ:1988:69)。日本のキリシタンが宣教師の元で教理を学んでいる間は、地獄に関する教理の理解を宣教師に仰ぎ、また正してもらうことができた。キリシタン迫害が徹底して行われ、キリシタンが潜伏した後は、西洋から伝えられた地獄の構造はどの程度変容したのだろうかという問いを立てることができる。本稿では潜伏キリシタンの間に伝えられた物語である『天地始之事』³で西洋から伝えられた地獄観がどのように変容したのかを検討する。

2 『どちりいな・きりしたん』における地獄

日本布教における決定版とも言える教理問答書『どちりいな・きりしたん』の「けれど」(Credo)では、キリストが「大地の底へ下り給ひ、三日目によみがえり玉ふ」と使徒信条がそのまま翻訳され、その「大地の底」の説明の中で地獄について以下のように説明されている。

大地の底に四様の所あり。第一の底はゐんへるのといひ、天狗を始めとしてもるたる科にて死したる罪人等のある所也。二には少し其上にぶるがたうりよとて、がらさを離れずして、死る人のあにま現世にて果さざる科送りの償ひをして、其よりぐらうりあに至るべき為に、其間籠めをかるゝ所有り。三にはぶるがたうりよの上に童のりんぼと

¹cf. マタ 25:41, マコ 9:48, 黙 20:10.

²この相違はザビエルも認識していた。「そしてもしこれを深く信じて少しも疑わずに自分のすべての希望と信頼をかけて、創始者(阿弥陀)の名を唱えるなら、たとえ地獄に陥ちた者でも救い出されると約束しています」(ザビエル書簡 1552/01/29).

³以降『天地』と略記する。『天地』物語内でイエスは御身、ユダは十だつというように聖書とは異なる名前であるが、煩雑を避けるため本稿内では聖書での名前を用いている箇所がある。

て、ばうちいずもを受けずして、いまだもるたる科に落つる分別もなき内に、死る童のゐたる所也。四には此りんぼの上にあぶらんのせよと云所有。此所に古来の善人達御出世を待ち奉られたる所に、御主ぜず-きりしと下り給ひ、彼さんとす達のあにまを此所より召し上玉ふ也。

十二世紀以降の西洋の地獄観を反映して、地獄の区別として重罪を犯した悪人のためのインフェルノ（地獄）、浄罪の場であるプルガトウリヨ（煉獄）、洗礼を受けていない幼児のためのリンボ、キリストの死以前の善人のためのアブラハムの天が区別され説明されている。これによりキリスト教迫害によるキリシタン潜伏以前には、十二世紀以降の西洋の地獄観が日本にも伝えられていることが確認できた。

3 『天地始之事』における善悪

どのような人間が地獄に行くと考えられていたのかという問題は、そのような考えを持つ共同体がどのような生き方を悪と考えていたのかという問題と関連する。『天地』における地獄を検討する前に、『天地』ではどのような生き方や行為が悪であると考えられているのかを検討する。『天地』における悪の用法は村落での伝統的な価値観を反映している。

村落での伝統的な価値観に由来する悪の用法は欲と関係がある。伝統的な価値観の欲に対する否定的な評価は、仏教における欲に対する否定的な評価にも由来しているだろう。デウスが稲作をもたらしただ後に、「悪心欲心の世の中になり、うんよく・貪欲・我欲といふもの三人生じて、善人の食物を、おのれがほしいまゝにぬすみ取、でうすこれをにくませたもふ」と言われる（海老名他:1970:386）。これは村という共同体において自己中心的で過度な欲を持つことが悪であると考えられていたことを反映している。この三人は「三めに角生ゑ、そのざますさまじく」（ibid）と相貌が説明される。欲が悪であるとされるのは他の箇所でも確認できる。イエスの弟子のユダに相当する十だつは、褒美の金の欲しさに師を訴人するという悪心を起こす（ibid:399）。ユダは褒美の金を受け取った帰り道に「にわかに其のざまひきかわり、鼻たかく、舌ながく」になってしまう（ibid）。イエスの死の場面では盲目が褒美の金の欲しさにイエスに止めを刺す（ibid:403）。「盲目は後生のたすかりあるまじく」（ibid）と言われることは、イエスを殺したことが原因かもしれないが、その行為の動機は金銭欲と結びついている。

他方、ルシファーの墮天についても村落での伝統的な価値観の影響が見られる。アダムとイブの話において、じゆすへる（ルシファー）は「鼻ながく、口ひろく、手足は鱗、角をふりたて、すさまじく有様にて」（ibid:385）、デウスに向かって「わが悪心ゆへに此さまに相成、行先とてもおそろしく、何とぞばらいその快樂を、うけさせたまへ」と願う（ibid）。ルシファーの悪心はデウスに背いたことであるが、これは欲に起因していると考えられる。上で説明したように「うんよく・貪欲・我欲」とユダは欲を持つことで恐ろしい相貌となっている。ルシファーも同じように相貌が変化していることは、ルシファーがデウスよりも高い地位に地位に就きたいという欲によって行動したのだと考える根拠となる。

『天地』における善については、悪と比べて価値観を明らかにするようなエピソードに乏しい。「御身後世助、始てなさしめたもふ事」で、イエスの昇天の後、

パライソに引き上げられる人々の中に、イエス誕生の際の宿主、三ヶ国の帝王、御弟子、麦づくり、水汲みのべろうにか、が含まれているが (ibid:405)、これらの人々はイエスに従ったり、いわゆる善行を施したことでパライソに引き上げられている。『天地』における善の用法も村落での伝統的な価値観に立脚していると想像されるが、イエスを信じるが含まれている点で、悪の用法よりもキリスト教伝承の影響を受けていると言える。

4 『天地始之事』における地獄

『天地』の冒頭部分にはパライソと地獄を含む十二天の説明がある。写本によって内容の違いがあるため、田北 (1954) と海老名 (1970) の本文を両方引用する。田北 (1954) と海老名 (1970) はどちらも下村善三郎氏旧蔵本 (通称「善本」) を定本としている。田北 (1954) は善本ではなく「松尾本」と呼ばれる写本にはある付加異文も乗せている。本稿では【-】内でその異文を記す。海老名 (1970) での冒頭本文は以下のとおりである。

そもそもどうすと敬い奉るは、天地の御主、人間万物の御親にて、まします也。式百相の御位、四十式相の御装い、もと一体の御光を、分けさせたもふ所、すなはち日天也。それより十二天をつくらせたもふ。其名べんぼう、此所地獄也。まんぼう・おりべてん・しだい・ごだい・はつは・おろは・こんすたんち・ほら・ころてる・十まんのばらいそ、此所則ごくらくせかい也。それより日月ほしを御つくり、数万のあんじよ思召すまゝに、めしよせたもふ也。

田北 (1954) の十二天部分の本文は以下の通りである。

それより十二天をつくらせたもふ。其なべんぼう、此所【いぬへると申す】地ごく也。まんぼう【とは此世界なり。】・おりへてん・しだい・ごだい・はつは・おろは・こんすたんちのほら・ころてる・十まんのばらいそ、此所【十万里四方びた一面にてつゆには夜るなし】則ごくらくせかい也。

冒頭部分は特に著者の仏教に関する素養が色濃く現れており、その素養の中にキリスト教に関する伝承を巧みに混ぜ込んでいる。十二天については「ばらいそ」以外の語の意味を確実に理解することはできないが、これらが元々何の語に由来しているのかについては、田北 (1954) は以下のように対応付けをしている。

「べんぼう」は Limbo(リンボ)、「まんぼう」は Mundo(世界)、「おりへてん」はオリベト山、「おろは」はコロナ(冠、ロザリオ)、「こんすたんちのほら」はコンスタンチノーブル、「しだい」「ごだい」「はつは」はアニユス・デイに由来する「アネステー様」(アネステーの功力の次第) というオラショの文句が物語に割り込んだもの、「ころてる」は「アネステー様」にある「此くりきは、よのかかりてのくりき、ころてると名をつけ奉れば・・・」とある功力の名前で、『天地』では天国である⁴。

⁴海老名 (1970:507) は「ころてる」が本文内でエデンの園を指す語として用いられていることを示唆している。この裏付けとなる箇所は「じゆすへるこれをきくより、ゑわ・あだんをたばかりとらんと、ころてるにいそぎける」(海老名:1970:383) である。

十二天には現れない煉獄が物語終盤に現れることにより (ibid:406)、十二天のリストには天国と地獄のすべては現れていない。冒頭部分からは以下の点のみ確認しておく。善本では十二天には地獄として「べんぼう」(リンボ)のみが現れている。それに対し松尾本では「べんぼう」は「いぬへる」(インフェルノ)であるとして、リンボとインフェルノを同一視している。

最初に『天地』におけるリンボの役割について検討する。ノアの方舟と民間伝承が融合したような話の最後で「べんぼう」は「波におぼれて死したる数万の人々、べんぼうといふ所、前界の地獄、此所におちける」と説明されている (ibid:387)。前界の地獄とは上層地獄という意味だろう。この箇所ではべんぼうは地獄の部分であると解釈できる。

舟で家族七人のみが生き残り、そのあと人間が増えるが、「うまれて死するもの、ことごとくみなべんぼうにぞ落ちける」とされる。デウスはこれを哀れんで助けるために自身の身を分けて、イエス・キリストが現れることになる。キリスト以前の人間がリンボに落ちるのは父祖のリンボ(アブラハムの天)の教義と整合している⁵。

幼児のリンボについては次のようにある、「先年、よろうてつに殺されし、数万の幼子、ころてるに迷いいるを、御身名をさづけたまいて、ばらいそに引き上げたまいけり」(ibid:405)。『天地』においては幼児のリンボはなく、『天地』でのリンボは父祖のリンボと一致している。これは『どちりいな・きりしたん』に幼児のリンボがあったことと異なり、リンボに関する理解が変容した点である。

次に『天地』における煉獄の役割について検討する。煉獄については「役々を極させ給ふ事」で説明されている (ibid:406)。この箇所はインフェルノの説明も与えている。

三-みぎりは、天秤の御役をかふむり、じゅりしやれん堂にて、科の次第を御ただしありて、善人はばらいそへ通し、悪人はいんへるのに落とし、又、科の次第にて、恥づかしく、科をいましめたもふ事也。

たとゑ、善あるものといふとも、天狗これをとらんとする。三-みぎりこれをくれじと、ばんのしう剣をもつて、天狗をさくる。ふるかとふりやゑへ通したもふという事。此時、達したる後悔するにおいては、いぬへるのをのがしもふ也。

又、人を害するか、自滅しけるものは、此所にて、あらため出され、いぬへりのに落され、末世までたすからざるといふ事、つゝしむべし。
(中略)

一、三-ぱうろ、善悪の御吟味御糺、善なき人は、ふるかとうりやに通し、科のおもきかるきにより、三時のあひだより、三十三年までの糺明を受け、其のち、三-じゅわん、御あらためにて、あぼうすところ御ゆるしをうけ、さんとうす御取りつぎを以、速やかにばらいその快樂を請奉るもの也。

煉獄の役割についてはカトリックの教義と整合しているが、煉獄に送られる人間については、完全に善人ではない人間と完全に悪人ではない人間の両方であると考え。「善あるもの」という表現からは完全に悪人ではない人間が想定され

⁵田北 (1954) は 1932 年 6 月 7 日太郎八爺の「ゼスキリストの前、極楽の蓋のあかぬ前は、死んだ人はコロテルやピンボウ (リンボ) に居た」という貴重な証言を載せている (p.85)。

る。一方、「善なき人」という表現は完全な悪人も含みうるような表現であるが、悪人がインフェルノに落ちるという説明との整合性から、完全に善人ではない人間を表すと解釈する。

『天地』での煉獄への言及箇所については、物語末尾に無題で後日での追加された想定される箇所 (ibid:408-409) がある⁶。その話で煉獄に落ちた人物は聖人になる人物の親友なので、完全に善人ではない人間が煉獄に落ちる例である。聖書にはこの話に対応する箇所はないので、煉獄は伝承として理解されずに伝わっていたのではなく、潜伏キリシタンが煉獄を死後の自分たちの問題として受け止めていたことの証拠となる。

最後に『天地』でのインフェルノの役割について検討する。先に引用したように「役々を極させ給ふ事」では、三-みぎりが善人はばらいそへ通し、悪人はいんへるのに落とすと説明されていた (ibid:406)。一方、最後の審判の場面が説明される「此世界過乱の事」では、以下のように説明される (ibid:407-408)。

評に曰、此時に、行きまようあにまあるといふ事。何故かと尋に、此界にて、最期の時、火葬にあふたるもののあにまなり。末世までまよ
うて、浮ぶ事これなしとふ事也。(中略)

かくて天帝は、大きな御威光・御威勢をもつて、天くだらせたまひて、道を踏みわけ、御判をうけしもの、三時の間に御選め、かなしいかなや、左のもの、ばうちすまうさづからざるゆへ、天狗とともにべんぼうという地獄にぞおちければ、御封印ぞなされけり。此所にをちたるものは、末代浮からずといふ事、又、ばうちすもふさづかりし右のものは、でうすの御供して、みなはらいぞへまいりたる。

最後の審判での地獄はインフェルノであるべきだが、「べんぼう」という語が用いられている⁸。この箇所のリンボとインフェルノの使い分けに関する混乱は、『天地』においてはリンボの役割がほとんどないことから、リンボがインフェルノに吸収され同一視が生じたのではないかと推測させる。『天地』では神の恩寵という思想がないこともあり、死後幼児はエデンの園に行くことにより、リンボに幼児はいない⁹。キリスト以前に死んだ人については、『天地』には旧約聖書部分が少ないので、ノアに当たる「ぼっぱ丸じ」ら七人以外は皆無名の人たちである¹⁰。

地獄が永遠の罰であるかどうかという点については、「末世までたすからざる」(ibid:406)、「末代浮からず」(ibid:408)と表現されている。「末代」や「末世」という語が有限である可能性を残すので、永遠であると断定することはできないが、

⁶どちらかが死んだ際には死後のことを教えることを約束した親友同士の話で、一人が死に、もう一方に現れた姿には煉獄の火がついていた。生きていた方はこの火をもらい、この世にて自分の罪を焼き滅ぼしてパライズに加わり、この火をもらった方は三とうす(Santos)様だという話である。この話からは死後速やかにパライズに行きたいという欲求と、殉教を含む⁷この世の善行を勧める意図を読み取ることができる。

⁸松尾本での十二天の説明でリンボとインフェルノが同一視されていたのは、この箇所との整合性のためかもしれない。

⁹フェレイラと儒学者の合作であると考えられている『頭偽録』では、デウスが慈悲の源と憲法(正義)の源でありながら、洗礼を受けていない稚き者が皆地獄に落ちることが批難されている(『頭偽録』:1930:9)。我々はこの箇所の作成が洗礼の重要性を理解していない儒学者によるものであると考える。洗礼に関する教義を聞いた日本人にとっては、生まれてすぐ亡くなった幼児が地獄に落ちることは理不尽だと思われたのではないかと考える。

¹⁰アダムは自らの後悔によってパライズに行くことができる (ibid:385)。

インフェルノから救われる記述はない点と輪廻に関する記述がない点から、永遠であると我々は考える。

以上での引用箇所を検討により『天地』ではインフェルノ（あるいはべんぼう）に落ちる人について、二種類の基準があることが分かる、「役々を極させ給ふ事」では、倫理的な善悪に従って天国か地獄かあるいは煉獄かが決定される。一方「此世界過乱の事」では、潜伏キリシタンの儀礼である水授け（洗礼）を受けているかどうかと土葬であるかどうかによって天国に行くか地獄に行くかが決定される。「此世界過乱の事」では煉獄は想定されていないと解釈する。なぜなら人間の善悪については完全な善人（聖人）と完全な悪人の間に中間段階が数多くあるのに対し、水授けを受けたかどうか、土葬であるかどうかは中間段階がないからである。

『どちらいな・きりしたん』では「ぜんちよと悪しきキリシタンとは、終わりになくゐんへるのゝ苦しみを受けてながらへ、がらさにて果てたるよききりしたんは天にをひて喜びを極めて、不退の命を持つべしと云える儀也」（ibid:47）とあることより、洗礼を受けたキリシタンでかつ善い人のみが最後の審判の後に天国に入る。『どちらいな・きりしたん』ではこの一つの基準のみがある。天国に行くためには洗礼が必要であるという教えが単純化され、水授けを受けていれば天国に行けるという内容に変更されたのである。

善悪に基づいた基準と習俗に基づいた基準の関係をどのように理解したら良いだろうか。『天地』の構成は、「盲目金に目のくるゝ由来の事」でイエスの死が説明され、「きりんとの事」でイエスの復活が説明される。「役々を極させ給ふ事」と「此世界過乱の事」は両者ともイエス復活の後のことを説明しており、独立性が高く、文脈によって二つの基準の間の関係を読み取ることはできない。我々はこの二つの基準が、整合性については曖昧なままに両立していたとみなす。民間信仰においては思想の完全な整合性は問題にならないからである。人を害するか、自殺したものはインフェルノに落ちる¹¹という説明（ibid:406）で、善悪に関する事柄と文化規範に関する事柄が並置されていることが、基準が両立していることの傍証である。

5 結語

『どちらいな・きりしたん』ではインフェルノ、煉獄、幼児のためのリンボ、アブラハムの天の四層構造であった。『天地』ではインフェルノと煉獄とアブラハムの天の三層の構造になっている。キリストの昇天後は幼児のためのリンボとアブラハムの天は空になるので、どちらも地獄はインフェルノと煉獄の二層になり、地獄の構造は一致する。地獄の構造に対しては潜伏期に入っても大きな変化は生じなかったのである。

西洋から伝えられたの地獄観と『天地』を生み出した潜伏キリシタンの地獄観との間の最も異なる点は、天国と地獄への人間の振り分けの基準である。潜伏期以前は洗礼を受けたキリシタンでかつ善い人のみが最後の審判の後に天国に入ると教えられていた。つまり潜伏期以前は天国に入る条件に善悪に基づいた基準と習俗に基づいた基準の二つが組み合わせられて唯一の基準をなしていた。しかし、『天地』においては天国に入るための条件について、善悪に基づいた基準と習俗に

¹¹ ユダが自殺した場面でのインフェルノのイメージについては拙稿『『天地始之事』におけるインフェルノと終末のイメージ』（https://yknishimuta.github.io/nishimuta_works/texts/images_in_tenchi.pdf）を参照。

基づいた基準が独立して語られており、一つの基準として統合されていない。潜伏期以前に振り分けの基準の変化は、潜伏期のキリシタンが先祖から受け継がれた儀式の遵守を最も重要視したことの結果である。

参考文献

- [1] 妙貞問答・破提字子・顕偽録、正宗敦夫 編、日本古典全集刊行会、1930.
- [2] 昭和時代の潜伏キリシタン、田北耕也、日本学術振興会、1954.
- [3] 日本思想大系 25 キリシタン書 排耶書、海老名有道他校注、岩波書店、1970.
- [4] The Case of Christvão Ferreira, Hubert Cieslik, Monumenta Nipponica, vol. 29, No.1, Sophia University, pp.1-54, 1974: (邦訳) クリストヴァン・フェレイラの研究、キリシタン研究 第 26 輯、pp.81-166、1986.
- [5] Le Goff, Le Naissance du Purgatoire, Paris, Gallimard, 1981. (邦訳) 煉獄の誕生、J・ル・ゴッフ、叢書・ユニベルシタス 236、法政大学出版局、1988.
- [6] キリシタンの神話的世界、紙谷威広、東京堂出版、1986.
- [7] 聖フランシスコ・ザビエル全書簡 3、河野純徳訳、平凡社、1994.